

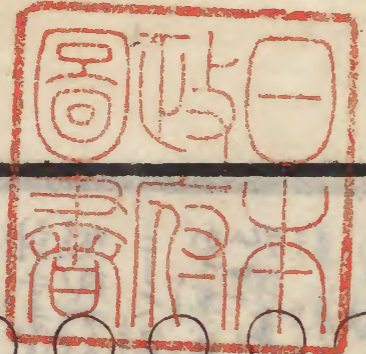
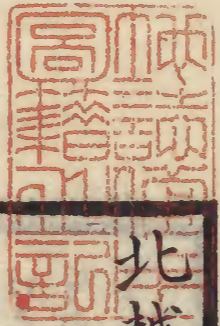
水越書譜 二冊 冬

和書門類		
三六五二六號	一	二
二	四	七
冊	架	冊

內閣文庫	
三五五二六號	和書類
五七	冊架
五	冊架

內閣文庫	
番號	和 36526
冊數	7 ( 7 )
函號	175 78





北越雪譜二編卷之四

目錄

- 異獸
- 弘智法印
- 白鳥
- 浮島
- 美人
- 苗場山
- 鶴恩小報

通計十三條

- 火浣布
- 土中の舟
- 兩頭の蛇
- 石打明神
- 蛾眉山下標準
- 三四月の雪



観小供を  
けい軍器  
の時代ハ  
棄て  
言を



阪野陣之圖

長の太郎  
説小遣ハ  
鎌倉より  
討手来しハ  
阪野女大将  
とて遠く  
りて軍を勝て  
野陣を張る  
事ハ本支ハ  
あり文ハ和  
けハ今省つ  
ら小一圖を  
の  
見曹の

北越雪譜二編卷之四

○異獸

越後 鈴木牧之編選  
江戸 京山人百樹増修

魚沼郡 堀内より十日町へ越す所七里あり村にありて山中の間道  
ありさてある年の夏のたどり十日町のちと問屋わりの内の問屋(白縮  
るふやど)をぎらるる一とひらけのあそこの日の昼まぐ頃竹助とのふ  
剛夫をえく荷物をあせし一たけりかぐて途も猶半小い  
ふらら日ぎらハセツふち一竹助をえく一とくまらのからうの石ふ腰かけ  
焼飯をくひぬるふ谷間の根笹をわく一とけく來る者ありちくよりたる  
を見ま猿ふ似て猿ふもあつて頭の毛長く脊ふたさうが半ハまら一  
丈ハ常並の人よりたかく顔ハ猿ふ似く赤くくを眼大ふく光りあり竹  
助ハ心剛ある者ゆゑ用心ふき一山刀を提よる斬んと身かまけるふ  
此のハさる氣色もあつ竹助が石の上ふちき一焼飯指一くまよと

とふさぬあり竹助をえく投す(け)げふひたり是めて  
竹助心をゆき一又まわつけげふひたり一ひけり竹助の入り  
我ハわりの内より十日町へゆくのあつてまらるる一又まら一  
をとるまら一しそまのつひふまらゆてまら一まきたる荷物をせま  
んとせ一ふらの荷物をとる一かまら一かふらけまらふまてゆ  
竹助をえくまら一の礼ふまらまらるるあんとあつてまらゆてゆ  
かのものかふものあつてまら一竹助ハ嶮岨の道まことまらふまら  
かまら一里半あり一の山まらまらて池谷村ちくふら一時荷物  
をまら一山まらけのむらそのまら事風のまらと竹助が十日町の  
問屋まら一語り一とく今ふらひつて是今より四五十年以  
前の事ありとの頃ハ山まらまらるるものをくハ此異獸を見らるもの  
もあつとぞ○前ふら池谷村の者の話ハ我と十四五の時村まらるの娘

雪譜二編卷之四 廿四 文楽堂蔵

小機の上手ありて問屋より名をきくもちぎをわつらひまじり  
 雪のまきえのそりたる窓のゆゑ小機を織るぬるふ窓の外ふ立つを  
 とまじり猿のやうあり顔赤くうづかいらの毛長くまじり人よりの大  
 ろのうさぎのまきけり此時家内の者いそひ山をせむふらむすも獨り  
 めまじりてまじり小機を織るぬる逃んとまじり機ふかりて腰ふまじり  
 つける物のあつて心ふまじりせむとまじりてまじりぬるまじりぬる  
 かまじりのゆゑまじり小飯櫃小指して欲さるぬるあり娘此異獣の  
 事をうゑり聞かぬゆゑ飯を握りてニニニわさけまじりてけり小  
 持よりけりそめも家ふ人まじり時ハをりて来りて飯をまじりぬる  
 後ふハ馴れまじりてまじりぬるまじりぬる○さて此娘 尊用ありて  
 急のちぎをわりかけ小折あり月水ふありて 御機屋小入る事  
 あらう御機屋の事初編 手を書き居る日限ふ後娘はまじりて双親も

此事を患ひ歎きけり月やより三日ふあつる日の夕ぐせ家内のりの農  
 業よりかつらざるをありてあやかのの久しかりぬるまじり娘人小  
 ものりかどく月やのうまじりをかたりて粟飯をまじりてあつるまじり  
 まじりのごとくまじり小立まじりてまじりぬるまじりぬるまじりぬる  
 けりまじり娘ハ此夜より月やをまじりてまじりぬるまじりぬるまじりぬる  
 身をまじりて御機を織果その父問屋へ持去り往着るとまじり入頃  
 娘時あらう俄小紅潮ふありてゆゑまじりて我が歎きを聞てかめめ  
 我を助へるんと聞く人くも不思議のまじりぬるまじりぬるまじりぬる  
 そのころ山中ゆゑたまじりてまじりぬるまじりぬるまじりぬるまじりぬる  
 形を見せまじりて又高田の藩士材用ありて樵夫をまじりて黒姫山小入り  
 小屋を作りて山小日をうりて時猿小似り猿ありてまじり物夜中  
 小屋小入りて焼火小あつりたけハ六尺をり赤髪裸身通身灰

山中異獸の圖



秋月葦牧之草

色あく毛の脱る小似より腰より下小枯草をまきふ此物よく人のいふ  
ことふあふひこのちあよく人小馴しと高田の人のいふを按ふ和漢三  
支圖會寓類の部小飛驒美濃あふ西国の深山あも如件異獸あふ事  
をあるせりささびつこの深山あもあふのあふ

○火浣布

宝曆年中平賀鳩溪源火浣布を創製し火浣布考を著し和漢の  
古書を引本朝未曾有の奇工小誇り没しその術つらう好事  
家の憾事とを志る小我國嘗火浣布を作すの石を産すその在所と  
金城山。卷機山。苗場山。八海山その外あもありその石軟弱しと爪を  
もつても犯さき木あ軟ある石ありいろあ青く黒しこまをくだけば  
石綿を出せ此石を得て試し小石中小在る石綿といふもの木綿とを  
細く袖るを三分わらふちぎりさうあるものあり是を紡績する小秘術

ありて火浣布を造るあり其秘術を得ば小女子も火浣布を織るべし

○さて我驛中小箱荷屋喜右門といふもの石綿を紡績する事小千思

万慮を費し竟ふ自その術を得て火浣布を織るをり又其頃我近

村大澤村の医師黒田玄鶴も同じく火浣布を織る術を得たり冬々

秘しその術を入小傳へざるふあるト時あるト村つぎあかあるト火浣

布の奇工を得るも一奇事あり是文政四五年の間の事ありき此兩

人の説をききし小力をつく其一文以上あるもの織るべしあるも其機工容易

ありとより平賀源内六織を五六尺小過ると火浣布考よりりまき玄鶴が源

内小まきより事ハ玄鶴ハ火浣布の外小火浣紙火浣墨の二種を造

まり火浣墨を以て火浣紙小物をまき烈火あけり火とありしを考

ふとついで火氣まき紙も字もそのごとくあるごとく其實用

をいへ火浣布も火浣紙も火災の供ふ憑 ぐりいんとあまは火り

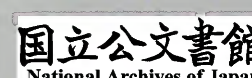
遇バ俱とも火ひとあり人あり火中よりいささか火ひと俱とも砕くだけく形かたちをじ  
 るたが灰あしとありざるのそありかえん觀かん見みふ用もちうる所ところありあぐあぐ源内  
 死しし奇術絶まじなり小件せうけんの兩人にりうじんの火浣布ひせんぷの機術きじゆつ再世さいせいひひ  
 嗚呼ああ可惜しやうひ此兩人こにりうじんも術じゆつをつゝとて後ごに言かたふ火浣布ひせんぷをとび世よひ絶まじ  
 たりかの源内げんないの江戸えどの饒地じやうち火浣布ひせんぷを機かのと其その聞きえ高たかくまの  
 兩人にりうじんの越後えちごの辟境へききやう火浣布ひせんぷをとりて其その名な低ひくあふらふある  
 一々いっさつ好事家こうじやの一話いっさつ小供せうこうす

○弘智法印

弘智法印こうちほふいんハ見玉けんぎよ氏うぢ下徳国山来村げとくくんにやまらいむらの人ひとあり高野山たかののやまふありく密教みくわうを  
 学まなび後生国ごせいこくふ飯いひり大浦おほのうらの蓮花寺れんげじふ住すまり行脚ぎやうきゃくし越後えちごふ来きり三  
 嶋郡野積村のづみむら里言りごん海雲山西生寺かいうんざんせいじの東ひがし岩坂いわさかとのふ所ところふ錫しやくをとりて草  
 庵くさあんをとりてとび一いっふ貞治二年癸卯十月二日しんぢににえいぼうじゅうごふににち此庵ここのあんふ寂じやくせり辞世しぜいとて

口碑こうひふつとつる哥かふ山岩坂やまいわさかの主ぬしを誰たれぞと人問ひととを墨墨すゐ僧そうふ書かきり松風の音しょうかぜのね  
 遺言いごんありとて死骸しがいを不埋ふなづり今いま天保九てんぽうくをさる事こと四百七十七年しよひしちじふしちしちねんふり  
 りて枯骸こがい生なるか如ごとく是こゝを越後えちご廿四寺にじふしよじのふ数かずふ此事こゝじ雜書ざつしよを  
 散見さんけんをとりて圖ずをのせつるものなりゆゑふ圖ずをさふいつて此圖こゝのず  
 ハ余あま先年せんねん下越後げえちごふあそび一時目撃いちめきしたる所ところあり見みる所ところを面  
 部ぶのミ手足てあしハ見えぞ寺法じほふありとて近ちかく觀みる事ことをゆるさば関眼かんがん  
 皺しわありとて眠かみりつるが如ごとく頭巾づきん法衣ほふえハむじのまゝあふらふらふら  
 是こゝ世国よこハ聞きざる越後えちごの一奇跡いっしきせきあり

百樹ひやくじゆ曰いふ唐土たうどハ弘智こうち似にたる事ことあり唐たうの世よの僧義そうぎ存没ぞんぼつハ  
 のち尸しかばねを函中おんちゆう小置せうぢ毎月毎月其徒そのととをいづりハつら髪かみの長ながさを前まへか  
 薙は常じょうとて百餘年ひやくじよねんを經へるも廢たいせざりしが後国ごこくのいづれらハ  
 因よてとを火葬くわさうせりとて又また宋人そうじん彭來へいらいが作墨客さくさく揮犀きせいハ





別州の僧无夢も尸を不埋丸髪の長う義存ふ同トかりし

婦人の子ふ摸らに

より丸髪のびざりし

とぞ事ハ五雜組小

記ハ枯骸の確論ハ

まども教氏を詰ふ

似ハ説ふまばらハ小

贅セをハ高僧傳小義

と覚ハかきのハと

詳究セ也



○土中の舟

蒲原郡五泉の在ハ一里をよりハ下新田とのハ村あり或年此村の者も更  
ありし阿加川の岸を掘ハ土中より長さ三間をよりハの船を掘ハり

全体ハ少シも腐レ形ハ今ノ船ハ異ナるノもハあらむハ金具を用フべきハ処ナらズ  
鯨ノ鬚を用ヒ寸鉄をもハやにしハるハ処ナらズ木もまハ何ノ木もを  
舟ハ者ノくハそハ異國の船もんハとハりハとハ余下越後ハ遊ビ  
時杉田村小野佐五左門ハ家ノかノ船ノ木ハ少ク作りタ碇箱を見  
小木質漢産ともハハ古漂流ノ夷船ハやハん

○白鳥

前ハもハ如ク雪譜と題スるハものハ他事をりハハハ哥ハりハ意題あり  
と雪ハまハ末ハらハ一ハ姑ハくハなハひハのハまハらハ○天保三年辰四月  
我ハ任塩澤ノ中町ハ鍵屋某ハ家ノやハりハ喬木あり此樹ハ小鳥ノ巢を  
むハびハ雛ハ稍ハ頭をいハてハ巢ノらハりハ白キ頭ノ鳥を見主人怪しシ  
人をしハ是を捕ルありハ小全身ハ鳥ハ小ハ白キ嘴眼足ハ赤キ鳥ノ雛  
ありハ人ハ奇ト集リ觀ル主人俄小篋を作ル心を盡シ養ヒ

や長し鳴音も鳥小異ありて我が近隣ありて朝夕を觀ふ  
奇鳥ありて人も多く江戸へ出しく觀物小せんありて有り  
主人をいへぬるさびかく其冬雪中ふりて山の鮑魚を餌小く  
人家ふきてりて食をねむ事雪中の常あり此の所為小笠  
川がきて白鳥の羽をり椽の下小ありときし初編小白熊の事を載  
たるゆゑ白鳥もまこと小記しぬ

○兩頭の蛇

文政十年庚の八月廿日隣驛六日町の在余川村の農人太左門の軒端  
小兩頭の蛇いてるを捕ふ長さ一尺ふたつを頭の二ツ並びて枝をうた  
のまゝもかちりて常の蛇ふくをあらふまをせりて箱ふりて餌も  
しきりて小三日をさぐるりて逃げきりやあつりをたづぬりてをさ  
ぎりりとぞ

○浮嶋

小千谷より西一里小芳谷村といふありて小郡殿の池とて四方三町斗  
の池ありて浮嶋十三あり晴天風ある時日出る十三の小嶋ありて  
離散し池中小遊ぶ如く日入る池の正中小あつまりて二の嶋とあり  
此池小種くの奇異ありて文多しきあるさび羽州の浮嶋ありて記  
しりて人の知る処ありて此うきまはあり人まことあり

○石打明神

小千谷の内農人某の地面小社あり石打明神といふ昔より祀る処也  
その縁起小聞りてせり贅肉あるもの此神をいり小石をうつりてを  
撫社の椽の下竹筒子の内投りて小日あつてりての事  
奇妙ありてさるげりて小石の形ありともりてりて人の圓め  
よるごとく圓石とありて又奇妙ありてさるが社のえんの下小大小の

圓石満ちたりり ○百樹曰余も小千谷小遊びし時此石を視て話柄小  
 一ツ持帰んとせし小所の人のいひやう此神是石を惜み玉をとりひつとふと  
 ききて取るをりとの怨へしつゝ視る小数万の石人の磨り  
 する玉のごとく凡神妙ハ肉知を以て測らざらん

○美人

百樹曰小千谷の因ふり余小千谷の岩居が家小旅宿せし時天保七  
 或日筆を採小倦山水の秋景を觀むやとく獨歩の心小千谷の前  
 小流も川小臨岡ふり用意しる書をく毛體を老樹の下小  
 ち煙のあつせつ眺望ハ引舟ハ浪小遡りさうごらるが如く下る  
 舟ハ流小順もく飛小似たり行雁字をるる帰樵画をひく  
 群木ハ少く霜を染く紅く連山の僅小雪を戴く白く寒  
 国の秋景江戸の眼を新ふるも一絶を得るごとく

むーあがめぬるをりーも十六七の娘三人あぐ柴簞をせおひ山  
 をのりてさふおをさひあやんものいひさうさうをきく余ハ  
 山水小目を奪ひさう小火をかるまきさう煙管さうよせつ顔を  
 見ま蓬髪素面あて天質の艶色花もりあぐ玉も比さう  
 百結の鶉衣比趙壁を羅む余愕然し山水を棄て此娘を視る小  
 一様し去り樹の下草小坐してあをあげてさせるの火を  
 うつゝむをり三人ひとく吹烟双無塩獨の西施と語る兼葭  
 玉樹小よるが如く皓齒燦爛とくさうら白芙蓉の水をいで  
 微風小揺がごとく嗟乎惜アか美人も是邊鄙小生も昏  
 庸頑夫の妻とあり巧妻常小拙夫小伴とく眠り荆棘と俱小  
 腐らん事憐不堪より若江戸小いづま朱門小解語の花を閑  
 あらひハ又青樓小揺泉樹の栄をり此隣國出羽小生とて

小野の小町が如く美人の名をもあまきこし此美人を此僻地不出  
 ず天公事を解さるふ似たりと獨歎息しつ言んとあふ娘ハ  
 去來とくあふび柴箆をせおひうちつとくまきりけり目送る  
 願越後少美人多しと人の口實ふのみもうべかり是無他や水  
 小よるゆゑありさまび織物の清白なる越後の白縮小勝とく  
 ありとくさく此邊ハ白縮を産する所あり以て其水の至清ある  
 をあづり江河潔清あるは女小佳麗多しと謝肇淛がひひも  
 理ありとあひひつ旅宿小帰り云々の事あり美人を視たりと岩  
 居小語りけは岩居のやう渠ハ人の知る美女あり先生を他國の  
 人と眼解欺くたどの火を借するん可憎く「吾くむむ」つら  
 吾たむの火を借て美人ふえん縁をむむび」と戯言けは岩居  
 手を拍り大に笑ひ先生誤りうとあ屠者の娘ありと聞くと再び

然り糞壤妖花を出るとあかふる事あせいひらるるべし  
 ○再按小野の小町ハ羽州の郡司小野の良實の女あり揚貴妃ハ  
 蜀州の司戸元玉が女あり和漢俱ハ北國の田舎娘世ハ美人の名を  
 つる北方小佳人ありといひも北ハ陰位ありは女小美麗を出さ  
 めやあふん二代目の高尾ハ御野州小生と初代の薄雲ハ信州ハ産  
 とし小北廓ハ名をあせりさまび越後小件の美人を見ても北國  
 あまふらるるべし

○峨眉山下橋柱

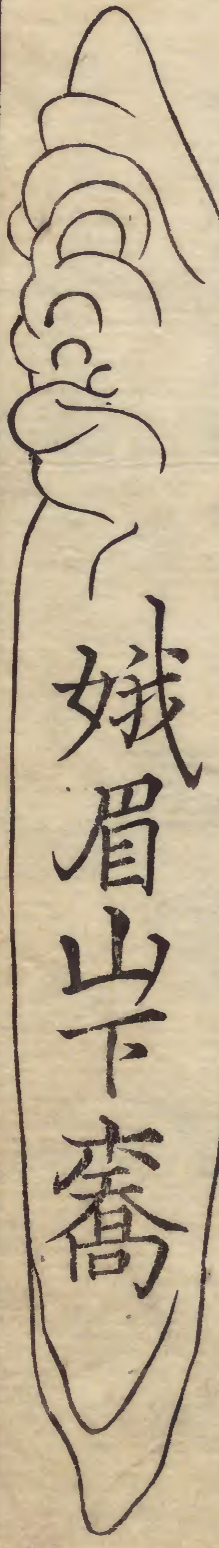
文政八年乙酉十二月新羽郡越後推谷の漁人推谷の堀侯の  
 海上ハ漁して一木の流し漂ふを見て薪ふせをやとて拾ひ取て家ハ  
 之の水を乾さんとき底ハ立寄むを推谷の好事家通りかり是を  
 見るとあふぬ木とあひ熱視ハ峨眉山下齋といふ五大字刻あり

しをりつゝかの国の物とひい漁人ぬ薪を与てむひうけふんとて  
 さて余が旧友觀劭上人推谷の田沢村の浄土宗祐光寺強学の聞えあり嘗て好事の癖  
 あるを以てかの橋柱の文字を双鈎刊刻同好あり且橋柱小題  
 まる吟詠をといは是も又梓あまの世に布んとせしむる故ありとむ  
 不果うの橋柱のち後小御領主の御藏ごぞうとありとて推谷ハ余が同国どうこくより  
 とも幾里を隔へとて其真物まぶつを不見今不遺憾わづらとて姑傳寫の圖を  
 以てて不載ふざい。百樹曰牧之翁が此草稿このしやうのせしむる面を見ふ少くも其所有  
 百樹曰了阿上人りやうあが和哥の友相場氏ハ推谷おひや侯の殿人とのととて上人  
 の紹介せうかいをいひて相場氏ハ對面たいめんして件の橋柱の事を尋たずふ  
 余不謂ふいふハ橋柱はしはしらぬあらず標準ひょうげんありとて俗不書翰帛よくしやうはんぱくといふ物  
 小作りこ作りするを出だして其圖そのずを示さる余が友の画人えいじん千春子ちしゆんしが真  
 物を傍かたわらふとて縮圖しゆくずあり娥眉山がびさん山下のやま齋さいといふ五字ハ相場氏

こづき心こころを深ふかめてうつさしとて下小圖なる彫うする人の頭あたまを  
 左ひだりり不顧ふこせその下したハ五字ごじを彫うつけハ是こゝより左ひだりり娥眉山がびさん山下  
 橋はしありと人ひとふをいひて標準ひょうげんありとてさしこまは是こゝより美理  
 渙あ然ぜんたり今俗いま不指ふさしをぬきとてそのあふをいひて所ところを記しる  
 するを間まする事ことあり和漢わくわんの俗情しやくじやうあり事ことあり。さて此標  
 準ひょうげんを得える實事じつじをさしハ北海ほくかいハこの所ところも冬ふゆふいさ常とこハ  
 北風ほくふう烈れつしく磯いそハ物をうちよめる推谷おひやハたきのふとかりき所  
 の多貧民おほいん拾ひろひ取りて薪かきとてその事こと常とこありあるハ文政ぶんせいハ酒さけの  
 十二月じふにがつ例れいの如ごとく薪かきを拾ひろひ不な出だし不な物ものあり柱はしらのごとく浪なみ不漂ふひょう  
 をさしむる人の頭あたまとて物ものぬ甚こゝろ兇惡けんあくあり貧民いんみん等ら悞あやまらな  
 さりぬのくげより見居けんいとて此こゝの竟つひハ磯いそハうちあげしむるを  
 見けんる人ひととてよりさなるハ文字ぶんじハあまも讀者よめいあり是こゝハ何なにもの

みんとさるべし評し居るをりしもろ近き西禅院の童僧  
 通りかゝり唐詩選ゆきわゆる蛾眉山の文字を讀とて唐土の  
 物ありとききて貧民拾ひて持よりさきとて唐土の物とて新ゆも  
 せざりし事聞傳し竟主君の藏とありしと語とて  
 ○按る小蛾眉山ハ唐土の北不在る峻岳也富士もくふべき高山  
 あり絶頂の峯双立し八字をあらせぬ蛾眉山といふあり此山の  
 標準日本の北海(あがき)よりなる其水路を詳究せんといふ唐土  
 歴代州郡沿革地圖小扱て清国の道程圖中を檢する小蛾眉山  
 ハ清朝の都を距ること日本道四百里許の北不在り此山小遠くも  
 一條の大河東小流蛾眉山の麓の河く皆此大河小入る此大河  
 瀘州を流し三峡のふもとを過ぎ江漢小至り荆州小入り洞庭湖  
 赤壁。潯陽江。揚子江の四大江小通し江南を流酒りて東海

小入る是水路日本道五百里をりありきて件の標準洪水也  
 水小入りけん。洞庭。赤壁。潯陽。揚子の海の如き四大江を蕩漾周  
 流し朽沈を溜くし水路五百餘里を流し東海小入り巨濤小  
 千倒し風波小方顛をまじり断折碎粉せむ直身挺然とて我  
 国の洋中小漂ひ北海の地方小近より推谷の貧民小拾とて始  
 水を辞と既小一爐の新とあるべきを幸小字を識者小遇ひて死灰を  
 のろし韻客の為小頌詠の美言をうけしものありて竟あり  
 推谷侯の愛を奉し身を宝庫小安んじ万古不朽の洪福を  
 保つ莫奇妙不思議の天幸ありと實小稀世の珍物あり  
 縮圖左の如し  
 一丈餘 闊二尺五寸餘 木質弁名(うす)



娥眉山下橋

登苗場山之図

霄間清露湿衣巾  
表際平蕪四望新  
呼吸極方通帝座  
徘徊却愧问天人

吐息毛雲とや  
かゝる森 峯の秋  
秋月庵牧之

下廿

里仁又

川曲千双信

秋村

秋山



按さざる小蛾こご同韻どういん 五何反ごにげはん 相通あひつう 往まう書見しよけん 橋はしを喬たけ小  
 作つく了り頗おほ異体いたいあり依よる明人めいじん 黄元立わうげんたつが字考じこう 正誤せいご 清人せいじん 顧炎武こえんぶが  
 亭林遺書ていりんいしよ中ちゆう小在せうざいる金石文字記きんしもんじきありハ碑文ひいぶん摘奇てつぎ 藤花亭十種とうかていじゆしゆしゆ  
 ありハ揚霖竹やうりんちく菴あん古今ここん釈疑しやくぎ中の字じ體たいの部ぶあり通卷つうせん一遍いん搜さう  
 索さくをさすことことも本ほん喬せうの字じあり蛾眉山かひざんのある蜀しやくの地ちハ都とを去さる事こと  
 遠とほき僻境へききやうあり推量すいりやうする小田舎おのゝの標準ひょうじゆんありハ學者がくしやの書しよハあり  
 ありハ俗子ぞくしの筆ふでありハさすことことも我今われこんの俗竹ぞくちくを竹ちくとイハ小誤せうご  
 の類るい猶博識なほたかしくしの説せつを俟まちつ

○苗場山

苗場山ハ越後第一の高山あり魚沼郡小登り二里とハ絶頂たつていハ天然てんぜんの苗  
 田あり依よる昔むかしより山の名な呼よぶあり峻岳そんがくの巔のぼりハ苗田ひょうでんあり事こと甚奇しんきあり  
 余よ其奇跡きせきを尋たづんとしハ事こと年としありハ文化八年七月偶ふハたらし

友人四人よじんにん 嘯齋せうさい・懶齋なんさい 從僕じゆふく等らハ食類じよくるい其外用意そのげういの物ものをりせ同月五日  
 未明みへいハたらしハ其日そのひハ三さん僕ふくとしハ驛えきハ宿しゆくり次日あした曉あけを侵おさりて此山このやまの神職かみハ  
 いつりありハ一いち杖じやうをありハ案内者案内しやを備たもふ案内ハ白衣はくゐハ幣へいを捧たげて先まハ  
 ちむ清津川きよつがはを涉せりて禁かむふいりて峻道そんどうを踏ふ峻路そんろハ登のぼる小榭樹せうせあじゆ  
 森列しんれつハ日ひを遮さり山篠生やまのたけハ茂さかりて徑みちを塞ふさぐ枯くる老樹折らうじゆせとし路ちより  
 横よこりてるを踰こるハ卧竜おりりゆうを踏ふとし一いち條じやうの溪河せきがはを涉せり猶登なほのぼる事こと半里はんり  
 許あり右みぎ折まりてるを左ひだりハ曲まりてる奇木怪石きこくわいせき千態せんたい万狀ばんじやう筆ふでを以もつ  
 ていりハ已すでハ半途はんどうハいりハ鳥とりの聲こゑをきくハ殆たいてい東西とうせいを弁わんとる  
 道みちありハ案内者案内しやハいりハ知しりハるハ山篠やまのたけをかりハ幣へいを  
 さらげてるを示しる藤蔓ふとうま笠かさハいりハ叢竹そうちく身みを隠かくり石いし高くたかくハ  
 徑みち狭せまく一歩いっぽも平阻へいそんのをさらすハ午ひるをくる頃山このやまの半はんハいりハ  
 僅わずかの平地へいぢを得える用意よういハいりハ卧座おしざを木蔭こかげハいりハ食たべるをありハ暫しばらくく



懋てもこのやうして神樂岡といふ所ふりこころより他木さうふ  
ろく俗ふ唐松といふ所の風ふたけをのぞきふ梢ハ雪霜や枯されん  
低き森をうてさかこふありまこのやうさう御花園といふ  
所山極盛ひき百合桔梗石竹の花をそのさぬ人の植やあひふ似たり  
名をまうさる異草あまこあり案内者ふ問ハ薬草ありといひりこ  
のやうゆきく棧越る道ふあつて岩ふとつき竹の根を力草と  
一歩ふ一声を発しつ氣を張り汗をまぎり千辛万苦一のやうにして  
馬の背とのふ所ふりる左右ハ千丈の谷ありあむ所僅ふ二三天一脚をあや  
すの時ハ身を粉碎ふるまへつ忙怖あやめて竟ふ絶頂ふりつきのぬ  
〇諸同行十二人すづ草ふ坐して懋ふ時已ふ下哺ありさう案内者の  
いひハ登り二里の険道ある一日ふ往來することあらば絶頂ふ小屋在  
るふのやう人必その小屋ふ一宿する事ありといひり今その小屋をこころ

信濃書二巻

三十七

木の枝山き枯草あど取りあつめらうつらう匍匐入るをうりふ作りた  
るハ野非人のをさうさぬありとを今夜のやうふさぬありとをさうとん  
とあつ笑ふ僕どのハ枯枝をひらひ石をあつめつ假ふ灶をうりつせたる  
食物を調ぜんといふあつ水をたぐつて茶を煮まじり上戸ハ酒の烟をいそぐ  
をじま眺ま越後へさう浅間の畑をさぬ信濃の連山を眼下ハ波濤を千隈  
川ハ白き糸をひき佐渡ハ青き盆石をわ能登の洲崎ハ蛾眉をあり越前  
の遠山ハ青黛をのぞりつら眼を拭く杖葉第一の富士を視つてやうその  
さぬ雪の一握りを置か如一人ハ手を拍奇ありと呼び妙ありと称讚を千  
勝万景應接する小道あつて雲脚下小起るうとさう忽晴る日光眼を  
射る身ハ天外ふ在が如く是絶頂ハ周一里といふ莽々たる平光高抵の所  
を不見山の名ふよ苗場といふ所さうこふありそのさぬ人のほり  
る田の如き中小人の植るさう苗ふ似る草生ひさう苗代を半とり

信濃書二巻

三十七

三十七

のりーるやうなる所をありてを奇ありとわらふ此田の中小蛙屋又虫を  
 ありて常の田を事なす又ある目もやも田水枯ると二里の巔此奇跡を観ること  
 甚不思議の美山あり案内者いひく御花園より別小徑ありて竜  
 岩窟といふ所あり窟の内小一條の清水ありてそのやうな古銭多く鱗口ニツ  
 掛りありて神を祀るむより如斯といひつゝふらのも今草木小塞と  
 してまゝありてとりて絶頂ありて石一刺して苗場大権現とあり案内者ハ此石  
 人作らぬ天然の物といひ俗傳をぞと見ゆがち目もまゝ小屋案内りハ  
 挑燈をさげくありて外ハ火を焼くまゝび食をさすのこゝにて酒を  
 酌六日の月皎々とてしと空もちり紀やうや桂の枝もをるまゝありて  
 人々詩を賦し哥をよみ俳句の吟興もありてや時をうりたるや寒  
 気次第小烈しく用意の綿入もまゝのじりて終夜焼火ありて夢も  
 むとびぞあつてのりめとらまらむいふをまゝにうたむべしや御來迎を拜

たまへと案内がりのふまゝを拜所いり日昇を拜しとて山  
 をくまゝり別小紀行ありて大 ○百樹曰余越遊する時收之老人小此山の地勢  
 を委し其畧をいひの 真景の圖をも視する小巔の平坦なる苗場の奇異竜岩  
 窟の古跡ありて水あり自在の山ありてわらわらしくハ上古人ありて此山をひく  
 絶頂を平坦あり馬の背の天険をたのまゝに小住居し耕作をそ  
 してつらびてのち其灵魂をふとまゝに苗場の奇異をもあそやと思ひ  
 国史を捜究せば其徴を端をも得べや博達の説を聞ん

○三四月の雪

我国冬六さうあり春ふありても二月頃まで六雨降る事あり雪のふるも  
 あるが春の半小いさむ小雨ふる日あり此時小いされ晴天ハもとより雨  
 ふも風あり去来より積雪をいへ小消るありさむも家居あり六乾り  
 北東あつる方ハある事あり山の雪ハ里地よりまゝあるまゝをけとて

市中四月雪解圖

雪解

文海堂藏



秋有葺杖之時年幸三筆

雪解

文海堂藏

春陽の天然てんねんのつとく雪解ゆきげ小水増こみづぞう川かみ小水難こみづがたの患うれひある事年々あり  
 春の生なまふいしる人ひとの住すまありの雪ゆき自然しぜんふまあるをまきどて家毎いえごとふ  
 雪を取捨とりすてふあるひハ雪を蓄たくわふしるもあつてもありあつひハ鋸のこぎりめく雪を  
 挽割ひきわりくまをもう又日向ひむかの所ところ杖木せうぼくのごくつらまきとあつてもありかやうふを  
 見みまあることなきゆゑあり少の雪は土をふけ又ハ灰はいをうくまきまき  
 のふらぎる日も空曇そらぐもりく快こころよく晴はるそを見みるハ稀まれめく雪小家居ゆきこゝろを降埋ふりうめめ  
 らま手てのこまはしるは是こゝ小生こゝろと是こゝ小慣こゝろく年としこの夏なつあまも雪ゆきふありの  
 をるハあつらう勝然しょうぜんとく心こゝろたのしく守まもるる小春こはるの半なふり雪ゆき田たを  
 取除とりのけは日光ひかり明あくとくくまめく人間にんげん世界せかいいさるあちぞせく一年いちねん夏  
 の頃ころ江戸えどより来きり行脚ぎやうきゃくの俳人はいじんを停とどまし小謂こゝろやう此国こゝの所ところふり  
 見みる小富家こふけの庭にわめ手てをつしるもあまど垣かきハげまも粗畧そりやくめく假初かりそめふ  
 作りつくりるやうありしるあつらふとらみ答こたへるふらびらりめもてつりありかり

そのふ作りむくハ雪ゆきのゆゑありしるゆゑあつらふつりよく作るとも一丈いちじやうのう  
 こを雪ゆきふち崩くずれくゆゑありしるゆゑあつらふつりよく作るとも一丈いちじやうのう  
 と語り事ことありしるゆゑあつらふ三月さんげつの末すえふり我われはしよと此垣こゝを作る事ことあり  
 さて又雪ゆき中なハ馬足うまあしもたれを耕うが作つくませる馬うまハ空くうく厩うまやふあをせむ事こと凡たゞ  
 百日ひゃくにちのまじり我國ハ牛の雪ゆきあつらふ時ときハ馬うまよくまのこまきりしる  
 嘶うなり路みちふらむ心こゝろあつらふ人ひとも又久ひさくちらあつらふ足あしをのまきせんわらわく厩うまやを  
 ひきしるゆゑあつらふしるゆゑあつらふ胸むね縄なはをりの裸馬ハ驕り雪ゆき消ゆの  
 所ところふらむ此馬こゝ冬ふゆの飼かひやうふらむ瘦と肥とよありかせるハ馬  
 主ぬしの貧ひん乏ぼうありしるゆゑあつらふ馬うまの飼かひやうふらむ童と雪ゆきのそとめより外遊そとあそび  
 事ことありしるゆゑあつらふ夏なつのそとめより冬履稿沓くつをきく  
 草履くさりせつふらりの用もちやうふらむ櫻も此こゝをきくゆゑあつらふ雪ゆきふ世外せがいの花はなを視みるあり

○鶴恩小報也

天保七年丙申の春我が郡中小千谷の縮商人芳澤屋東五郎俳号を  
二松といふもの商ひの為西國小千谷或城下小逗苗の間旅宿の主がを  
一此近在の農人のまが田地のうち小病鶴ありて死ふいふんとするを  
見つけ貯る人參りて鶴の病を養ひ小日あつて病癒て飛去りけり  
さて翌年の十月鶴二羽かの農人が家の庭ちり舞ひてり稲二莖を落  
し一声づ鳴て飛去りけり主人拾ひてり見ふその丈六尺小あまり穂  
も是小つと長く穂の一枝小稲四五百粒あり主人おつて去年の  
病鶴恩小報んとり異國より啞えきりていふん何れもあまりとめづ  
らき稲ありとて領主小奉りけり小きむとてあまり穂のちりその  
まゝ主小なまらりて中あつてあせふよりと苗のちり心をつて  
植つけり小鶴があまり小らるるどよと生ひりけり國の守りも奉り

一とう言ひ東五郎猶との村その人をも尋まけり鶴を助けし人  
東五郎が縮を賣りて家あるをいふと家小いり猶委く聞て去る國の  
産小せん穀を二粒賜ふとていふと越後ハ米のよき國といひ  
ことさう小生ひるさの五六十粒ありてを國へ持りて事の来由を  
邦君小奉りて御城内小植り玉ひ東五郎一御褒賞ある在りと  
小千谷の人その頃物ごまりあつて小余がとて賤農もかゝるめい  
御代小生息とて安居して筆も採りて去る昌平を  
いのり鶴の話小筆をとめつ猶雪の奇談他事の珍説あつて漏  
るも最多けり生産の暇あつて編を編べ

北越雪譜二編四卷大尾

通巻画圖 京水 岩瀬百鶴筆



京山人百樹翁著述目錄

○和漢印章考 五卷

本朝古印の模本を圖一制度用格を弁む考證漢印小供を以て和漢と目せす朱象賢が印典の作格小倣ふ

○食物沿革考 五卷

昔の食物と今の食物の沿革を弁ト食器の古圖ありこの諸書を引て考をまゝと

○和漢押字考 三卷

俗小書判といふもの起原を考へかきもの作りやうを論弁せり

○骨董集三編 卷二 四編 卷二 醒齋京傳先生遺稿京山人翁増修

○女粧考 前後 六卷

○芭蕉年譜 三卷 一世紀一代の始終を考へ

○高尾考 同 万治の高尾白刃不死の事説を論弁し高尾十一代の傳遺墨遺器を考へ

○茶の湯初心抄 同 茶の湯を学ばる人此書をこればちの大槩をあり茶席のつゝありて日耻をえざる心得を考へ

曲亭馬琴翁編集 著作堂一夕話 全五卷

此書曲亭馬琴翁著述の長壽史五十年來見聞せし珍説古今未だの高論ありて集り新奇妙談の多し人聽入実小曲亭小対してその語を聞か諸君近き小發行をす

御伽やう話 全十卷

この書は古今の奇談珍説の原本より凡小説怪談の書多しといふ御伽やう話の上のあり和漢の奇談を考へて巻中よりて考へて實小怪談奇談の最第一の物語さればの本を作るとありぬべし

閑窓瑣談 全六卷

遊ハせふある隨筆の旨趣と事より雅俗を不倫博識なり珍文漢文を考へて見女童家小讀易きを考へて聊も字か自慢の事を載む古人今人の傍の面白きを集りて六養生小のこ教へんと考へて巻を用け益ありぬ

天保十三年 壬寅孟春

心齋橋通順慶町 屋新兵衛

全志發行書林

大坂 心齋橋博勞町 河内屋茂兵衛

江戸 小傳馬町三丁目 丁子屋平兵衛藏版

